
その執事、大胆不敵

箕 霞流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その執事、大胆不敵

【Nコード】

N6570Y

【作者名】

篁 霞流

【あらすじ】

ピレネー大陸の大部分を占めるカルデア神聖大統一帝国。

その帝国を築いたのは、不幸の果てに王位に就いた女王と泥の中から這い上がった執事であった。

彼らはいかにして、帝国を統べるに至ったのか。
その壮大な物語が今、始まる。

(R - 15 は念のためです。今のところ予定はありません。)

プロローグ

コルベール暦1544年。

その日、カルデア王国 王都ペンタグの王宮殿・フィラデルの大広間横、「控えの間」には静寂が満ちていた。

その部屋の奥にはカルデア王国第28代君主たる女王・シシリア「マイアー」ド・イジュールが王座に泰然と腰かけていて、その数メートル扉側に下がった位置には一人の男が跪いている。

俯いて顔の表情を読み取ることが出来ないが、黄金に染まった髪は「控の間」の品の良い調度品に埋もれることなく、その姿に、一分の間も見当たらぬ。

「面を上げよ」

女王の良く通る声が、白紙に落ちた一点の染みのように広がってゆく。

その声にこたえて、頭がゆっくりと持ちあがりその相貌が明らかになった。

雪のように白い肌に、紺碧と緋色のオッドアイは良く映えており、その男が「神の造形」と呼ばれていることをまざまざと思い出させる。

「フォンビレート」メイリー「ダ・エルバルト。そなたを、第32代イジュール家の筆頭執事に任命する」

その男 つまり、フォンビレート「メイリー」ダ・エルバルトの目と、女王の目がゆっくりと合わさった。イジュール家つまり王家の筆頭執事に任命されるということは、内政のパワーバランスの重要な局面を荷っており、任命式に先立って王国議会の承認が必要で

あることが王国法第145条にて定められている。此度の任命においてもそうであり、先立って議会での議決を経ている。

「先だつて行われた王国議会にて、異議10沈黙80により承認されている。よつて、そなたにこの任の如何は委ねられた。この任、受けるか否か？」

女王直々の問いかけ。

その問いかけに誓いの言葉をもって答えることによつて、終わりを迎える。

後々、各報道人によつて国民に公開されることが決まっており、国民はそれに今代執事の力を見るのだ。よつて、つつがなく終わらせることがなによりも重要であり、シシリアも廊下に控える重鎮たちもそれを期待していた。そしてそれは達成されるはずだった。

「生涯の全てを懸けシシリア「マイアー」ド・イジュールの御為に働き、忠節に歩み忠誠を保つことをここに誓う。」

フォンビレートがシシリアの名に誓わなければ。

歴史書は語る。

彼の男。

碧き左眼と灼かな右眼あつたを持ち、頂に金色を纏い、黒衣を翻し、その純白の肌は朱が染め上げた。

唯唯王と共にあり、千里を焼き尽くす炎と万里を翔る翼を与えられた。

カルデア王国史上唯一、君主のみに忠誠を誓った男。

「女王の懐刀」「カルデア王国の誉れ」「草原の栄光」とたたえられた男。

その才でもって、史上最高の為政者・シシリア「マイアー」ド・イジュールのそばにあり続け、王国に繁栄をもたらした完全無欠の執事。

王の楯。王の槍。王の力。

フォンビレート「メイリー」ダ・エルバルト卿。

彼の波乱に満ちた生涯は、この任命式を持って、本当の意味での始まりを迎えた。

？ ・騒動は初めから 前篇（前書き）

感想・御意見・御指摘 絶賛受付中です。
よろしく願います。

？・騒動は初めから 前篇

「なんてことをしてくれたのかしら、フォン？」

シシリアの冷たい視線にフォンビレートは一切動じなかった。

「申し訳ありません。偽りを述べることは許されない、と聞いたものですから」

素知らぬ顔をして、紅茶を手際よく入れている。

フォンビレートが前代未聞の誓いの言葉の改変を行った後、宮殿は大混乱に陥った。

なにしろ、録音された音源は国民に公開しなければならぬのだ。

「シシリア＝マイアー＝ド・イジュールの御為に」ということはつまり、王家も国民も眼中にないと宣言したに等しい。影の執政官とまで言われる執事が「何かあつたら、女王以外は見捨てます」と言っているなどあつてはならないのだ。

かといって、仮にも「誓い」の言葉を録り直すわけにもいかない。カルデア王国には「誓約したことは果たせ」という簡潔かつ絶対の箴言があり、録り直すなどという選択肢は存在しない。たとえそれが儀礼的なものであつても、行つてはならないのだ。

それにも関わらず、顔色一つ変えない自らの執事に、シシリアは苛立ちも忘れて呆れていた。

「あなたね・・・事の重大さがわかつているの？」

その問いに、ついとほんの少しシシリア側に顔を向け、

「分っております」

と静かに答えるフォンビレートにシシリアは今度こそがつくりと肩を落とした。

「だいたいね、大人の対応っていうものがあるでしょう？お・と・な・のね。別にわざわざ入れる必要はないじゃない」

「しかし、入れない理由にはなりません。それは誤解を招くと知っ

ていながら行つ性質の悪い、詐欺にも等しい行為です。陛下はまさかそのようなことを望んでおられたのでしょうか？それでしたら、私は深い謝罪を行わなければなりません。陛下の御心を酌めない私など・・・」

「もういいわよ!!」

フォンビレートの長々と続く嫌味にシシリアは白旗を上げた。もとより、口から生まれてきたとしか思えないこの執事に勝てた試しはない。かれこれ13年も永い間、シシリアはただの一度もフォンビレートのあわてた姿を見たことは無かった。

「よくわかつたからいいわよ。・・・あなたつてもとからそうだし。・・・20も年下の男に言いくるめられる女王つてどうなのよ、本当に」

やや自嘲気味にぼそぼそと呟くシシリアは今年で43才であり、カルデア王国の寿命でいえば「中年」の部類である。一方、フォンビレートは今年18才になったばかりであり「青年」あるいは「少年」と呼んでもいい年齢であった。もちろん、歴代筆頭執事の中で最も若い。

「陛下、問題は22才年下かどうかではなく、たかが一使用人に勝手を許していることであるかと思われませんが」

「うん、とりあえずそれ止めて頂戴。腹立たしくてこのまま王位も放棄してしまいたいから」

さりげなく正確な年齢差を示しつつ指摘するフォンビレートをシシリアは半眼になって睨みつけるが、やはり顔色一つ変えずに

「アルイケ産の茶葉にございます。こちらの地方の茶葉は近年人気が出てきており、試しに卸させてみました。お口に合いましたら継続的に買い取りを行おうと思っておりますので、率直なご感想をお願い申し上げます」

と話題転換してしまう。

シシリアにはそれが癢に障るのだが、実際このまま言い合いが続くほうが不毛であるので、しぶしぶながら紅茶に手を伸ばした。

口に含んだそれは、たしかに薫り高くほんのりと甘い。

「ん、美味しいわね」

シシリアは言われたとおり、感想を漏らした。だが、

「それはようございました。毒入りの茶葉を注意深く避けた手間が報われたというものです」

「は？」

続くフォンビレートの言葉に思わず聞き返した。

「それはようございまして」

律儀に繰り返そうとする言葉を視線で遮り、説明を求める。

その視線を受けて、フォンビレートは口を開いた。

「昨年の春のことです。門衛より「商人が面会を求めている」という報告が上がりました」

「昨年、ということとは王宮殿ではなくメリバ宮殿のことね」

メリバ宮殿というのは、王位継承権第1位の者が住まうことになっている宮殿であり、そこに住まうということは次期国王であることを暗示している。昨年の春は、ヘンリル前国王がまだ健在であり、シシリアはそこで過ごしていた。

「はい。その通りでございます。その東門に現れた男は、ヒデロムの商人であると言い、最近いい茶葉が手に入ったので是非賞味してくださいか、とのことでした」

ヒデロム伯爵領地はメリバ宮殿の周りにある。より正確に言うならば、ヒデロム伯爵領地内にメリバ宮殿という飛び地を王家が所有していることになっているのだ。よって、その地の行商がメリバを訪れたとしてもなんら不思議ではない。

「それで？どうしたの？」

「丁重にお断りいたしました」

フォンビレートの答えに、シシリアの顔が険しくなる。

「なぜ？」

ヒデロム伯爵位は建国の時からつき従う名門貴族であり、名騎士を

多く輩出していることから「忠義の伯爵」と呼ばれている。故に、王家からの信頼も厚く、ヒデロム伯爵領に関してかなりの優遇措置をとることが暗黙の了解となっていた。

今回のような件がある場合、警戒はすれど門前払いするほどではない。

「理由は3つございます。1つは、その男が浅黒い肌だったことです。」

「それが？」

ヒデロムの住民は皆、東方系の血筋であり、その特徴は目のふちの赤みと浅黒い肌であり、おかしいところはない。

「極めて純粹な、浅黒さでございました」

純粹な、と強調したフォンビレートの言葉にシシリアは僅かに目を見開く。

「それは、変だわ。ヒデロムは既に混血の民族となっていて純粹な者などどこにもいない。せいぜい伯爵家が限りなく近い、ぐらいのものでしょうか。そして・・・」

「はい、伯爵家が商人の振りをするなどありえませんが、まして私が伯爵家の人間を見分けられないはずはございません」

フォンビレートの自信を持った言い切りに、シシリアも頷くことで同意する。

フォンビレートが18才という若さで筆頭執事まで上り詰めることができた理由の一つは目鼻が効くことであった。国内のあらゆる貴族、その使用人に至るまでフルネームはおろか家族構成まで述べることのできる頭脳と、人並み外れた観察眼。

ゆえに、仮に伯爵家の者が冗談で変装していたとしても、彼が見破れないことなどあり得なかった。

「第2に、一昨年から昨年にかけて、ヒデロム領地は南のオルフェルが大飢饉に襲われております。無論、全体としては例年通りの収穫でしたから、死者は一人も出ておりませんし、表にもあらわれていません。しかし、オルフェルの特産品である茶葉は例年の10分

の1しか獲れず、価格は高騰しました」

フォンビレートの言葉に、シシリアは報告書だけで上がっていた大飢饉の顛末を思い出した。確かに茶葉の価格は上がっていて、そのまま卸しては買い手がつくはずもなく、一方、その価格でなければ売り手の生活が成り立たなかった。そのため、ヒデロム伯の裁量により、救済措置がとられた。

「救済措置は、伯爵家が全ての茶葉を買い取り、領地に例年通りの価格で卸すこと」

「はい。よって、伯爵家の人間以外が買い取りのお願いに来るはずもございません」

シシリアの雰囲気徐徐に鋭さを増してゆく。

「……第3の理由はなに？」

「第3は、その者の持つてきた茶葉から僅かにラベンダーの香りのしたことです」

「ラベンダー？ヒデロムにラベンダーは咲かないはずよ？」

「その通りでございます。その者の衣服からも匂っていましたからおそらくは、ラベンダーの咲き誇る道を通ってきたものと推測されました」

「……」

「陛下、そのような道があるところをご記憶でしょうか？」

「……もちろんよ、アルイケ侯爵領とヒデロム伯爵領を結ぶ、3キロの道のり。特に、人目を避けて、野を突っ切れば余計に匂いが付くでしょうね」

ここにきて、問題の茶葉の産地・アルイケ侯爵領が登場した。

「はい。よって、門に現れた商人は、本人の申し立てたヒデロム伯爵領下の商人ではなく、アルイケ侯爵領下の商人であると結論付けました」

アルイケ侯爵領下の商人であるとすれば、最初の2つの違和感に対しても理由をつけることが出来る。アルイケ侯は確かに東方系の子孫であり、血統主義を標榜しているため未だその特徴が色濃く継が

れている。

それに、アルイケ領の西・キップは茶葉の名産地であり、昨年は豊作であった。王家にも献上されたため、よく覚えている。

「間違いないでしょうね……」

「はい、おそらくは。アルイケ領下であるならば、優遇の必要性はなく、むしろ領地を偽ったことでおさら警戒の必要な人物であると言えます。よって、丁重にお断り申し上げました」

フォンビレートは、ぬるくなってしまった紅茶をさりげなく取り上げながら、話を締めくくった。別の茶葉に入れ替え、丁寧にお湯を注ぐ。その作業に細心の注意を払っているフォンビレートにシシリアの声がかかった。

「で？」

「で？とは？」

フォンビレートが哲学問答のように答えて見せれば、シシリアは盛大に眉をしかめた。

「では、で？以外の何物でもないわ」

と問答で返し、小さな意趣返しを行う。

「それでは、アルイケ産の茶葉が毒入りになったことと何も繋がらないわ。どうせ、有能な執事たるあなたには分かっているのでしょう？聞かせなさい」

「……ご要望とあらば」

シシリアの投げやりな言葉に、フォンビレートは僅かに頭を下げて話し始めた。

「帰って行く男を隠密方につけさせました。案の定、その男はアルイケ領に帰って行ったわけですが……」

「何を見たの？」

「その茶葉を、途中のラベンダー畑の中に撒いた後、悠然と去っていたそうでございます。」

「まあ、用済みなものね」

シシリアは思ったより、それがひどい報告ではなかったのでほっとしていた。ゴミの廃棄などとして欲しくはないが、茶葉はそのまま栄養となるのだ。たいしたことではあるまい。

だが、その考えはフォンビレートの次の言葉で打ち砕かれる。

「その2、3日後、ラベンダー畑の4分の1が枯れ果てました」

「えっ?・・・そんなこと報告に上がっていないわ!」

自分の知らない話が出てきたことに、シシリアは声を荒げた。どうして、そのような話が自分に上がっていないのだ、とフォンビレートを睨みつける。

「申し訳ありません。本来であれば、報告すべき事項ではありましたが、ちょうどその日はヘンリル陛下の1年に1度の視察の時期と重なり、シシリア様がお忙しくしてらっしゃいましたので」

フォンビレートの言い訳に、シシリアは頭に血が昇るのを感じたが、その一瞬後に青ざめた。あの時は、確か、ものすごく忙しくて

「『そんな報告、どうでもいいのよ!』とおっしゃったものですか」

「・・・ごめんなさい」

シシリアは、自分の失態であることを認め小さくなる。

「いいえ、私のミスです。陛下の時期を見誤ったのですから。・・・

・問題は、その毒物の内容です」

シシリアの言葉を否定し、フォンビレートは強引に話を続けた。

「猛毒、シュバルツがそれでした」

「シュバルツ!」

その毒物の名前に、シシリアは落ち込んでいたことも忘れて、叫んだ。

シュバルツというのは、「シュバルツの花」という植物の根からとれる猛毒である。致死量は小指の先ほどあれば良いとされており、盛られた場合、十中八九助からない。この毒の最大の特徴は、気化しようが液状化しようが粉状化しようが毒性を持ち続けることにある。つまり、吸うだけで死にいたる可能性すらあるのだ。よって、

国の危険物指定を受けており、所持しているだけで罪になる。そんな毒が、得体のしれない商人の茶葉から出てきたのだ。

「では、ラベンダーへ追跡を行った者や、……あなたは？大丈夫だったの？」

心配げな瞳をするシシリアに対し、フォンビレートは僅かに微笑んだ。

「御心配には及びません。今回、シュバルツは粉末ではなく液体の形で用いられたようです。シュバルツに茶葉を浸し、それを持ってきたものと思われます。大地へ浸みこむことを止めることはできませんでしたが、素手で触る愚行さえ起こさなければそれほど被害はありません。そして、イジュール家にはそのような愚か者は存在しませんので、ご心配には当たらないかと」

「……あなたって良い性格しているわよね。……敵だって、まさか「愚か者」しか引つ掛らないと言われているなんて思いもしないでしょうに」

フォンビレートのイジュール家使用人としての誇りと敵を見下す気持ちがないまぜとなった言葉に、シシリアは呆れたように笑った。

「いえ、陛下に齒向かう者は全て愚か者にございますので、死ぬ者もあるやもしれません」

不敵な表情ではつきりと言い切るフォンビレートにシシリアは何とも言えない心持ちになった。彼の絶対の忠誠心はいつだって気持ちが良い。

「……続きはいかがなさいますか？」

「もちろん、聞くわ」

フォンビレートからの信頼を背に、シシリアは覚悟を決めて深くうなずいた。

？ ・騒動は初めから 後篇（前書き）

ここで、ストックがキレましたので（いや、早っ！とかいう突っ込みはなしでお願いします）更新が遅くなります。週1が限界ですの
で、ゆっくりお付き合いいただければ幸いです。

？・騒動は初めから 後篇

「では・・・」

シシリアの覚悟を受け、フォンビレートは話を進める。

「さて、アルイケ侯が陛下を狙ったという仮定を立てますと、動機が見当たりません。先の大戦の前アルイケ侯の働きはすさまじく、その働きへの報いとして侯爵位は授与されています。現アルイケ侯は野心のある人物ではありますが、陛下を毒殺することにより得られるものと、企みが明らかになった場合に失うものの比重が釣り合っていないように思われました」

例え、シシリアが殺されたとしてもアルイケ侯にはなんのメリットもない。確かに、国政の重要な局面に立ち会うかもしれないが、所詮は侯爵位であり公爵位には敵わない。もちろん、3公爵が愚かであれば違つかもしれないが、今代公爵達はそれぞれに優秀であった。故に、決定権を荷うことはまずないだろうと思われる。

「・・・それで？あなたの突き止めた動機って何かしら？」

「陛下、私が、一日の休暇を申請しました事を覚えておいででしょうか？」

「ええ、覚えているわ」

フォンビレートは5才の奉公以来、ただの一度も休暇を取ったことはない。彼自身に行くあても帰るあてもなかったこともあり、重度の仕事中毒者の側面があつたためだ。休暇を取るように勧めても拒否し、無理やり休ませても邸内の草むしりを始めて、問いただせば「休暇ですので、自然と触れ合っております」としれつと言いつつ、だから、フォンビレートが「お暇を頂きたく・・・」と言った際、誰一人休暇の事だとは思わず執事を辞めてしまうのだ、と皆思い込み大騒動に発展したのだ。

「その日、私は王都に参りましてヘンリル陛下と非公式にお会いいたしました」

「父上と？」

「はい。目的は王国法の原本を見ること、もしくは内容を教えて頂く事です」

『王国法』とは、また厄介な話である。その名の通り、原則から細則までありとあらゆる法律が定められている。そのほとんどは国民議会により可決されており、誰でも見ることが出来るが、例外は存在する。

「原本・・・ということは、王位に関する法律が見たかったということ？」

王位に関する法律は、一般に公開されておらず（もちろん、基本的な部分は建国の際に明らかにされているが）王篡奪者による暗殺を防ぐため、基本的に第1位の継承者以外は発表されない。

「はい。その通りです。もちろん、ある程度の確信のもとに向かつておりました。」

「確信？」

フォンビレートの鋭い双眸がふつと鋭くなり、話が核心に近づいていることが分かった。

「陛下はご存じ無いかもかもしれませんが、前アルイケ侯は、ヘンリル陛下の治世のおり、王位継承権を得たことがございます。流行り病により、一時的に直系王族が絶えた際、第1王女シュレ様の御子にあたる前アルイケ侯、当時のアルイケ伯が、第1継承者となり「アルイケ王太子」であったことがあるのです」

フォンビレートの言葉にシシリアは驚きを隠せなかった。

シシリアの知る前アルイケ侯は、野心はあるが王位篡奪を狙うようなものではなく、領地を良く治める為政者であった。昔、王位継承権を持っていたことなど知りもしない。もっとも、それはシシリアの生まれるずっと前のことであり、知っていなくとも当然と言える。逆に言えば、知っているフォンビレートがおかしいのであり、シシリアとしては問い詰めた気持でいっばいであった。それが、時間の無駄であることを承知しているので、それを断念して黙って先

を聞くことにする。

「2年ほど、より正確に言うならばコルベル暦1480年の秋までは第1位継承者であり、1501年まで継承権を保持していました」

「1501年、ということとは、私が生まれるまでということね」

「その通りです。陛下の誕生により王位継承権第5位までが埋まったことになり、そこで前アルイケ侯は継承権を失いました。もっとも、第1継承権は随分と前からありませんでしたから、侯爵が継承権を失ったことはそう大きな話題とは成らなかったようですが」

「まあ、そうでしょうね。で、その話と今回の毒入り茶葉はどうつながるのかしら？」

「はい。前アルイケ侯の死後、相次ぐ事故死により陛下が王位に就かれることになりました」

「そうね。・・・あつ、もしかしてお兄様やお姉様を殺したのがアルイケ侯ってこと？」

兄や姉を失った悲しみを未だに引きずっているシシリアは血相を変えてフォンビレートに詰め寄るが、彼は首を振ってそれを否定した。「いいえ、それに関しては全く事故であることが、調査委員会によって証明されていますし、真相といったところで、推測に至るのがせいぜいです」

シシリアはフォンビレートの言葉に落胆したが、続く

「但し、それが原因であることは確かでしょう」

という言葉に、再び顔を上げた。

「えっ？」

「その死に、多くの人々が共通の懸念を抱きました。つまり、王家が途絶えた場合、内戦になるのではないか、という懸念です。しかし、王位に関する某かの動議は国民議会において提出された形跡はありません。かといって、懸念だけ抱いたまま何の手立ても用意しないということも考えにくい。とすれば・・・」

「御前会議ね・・・」

「はい、それによって何らかの手立てが用意されたと考えることが出来ます。それを確かめるため、ヘンリル陛下に面会いたしました。」

「・・・結果は？」

「もちろん、一使用人の立場で原本を見ることは敵いませんでしたが、ヘンリル陛下は質問に答えてくださいました。一昨年の冬に御前会議にて、王国法第1条に細則が加えられることとなったようです。」

「一昨年の冬・・・」

「はい、カイル殿下がお亡くなりになったところのことです」

第4王子であるカイルは、シシリアの5つ離れた兄である。当然、当時は継承順位が第1位であり、カイル王太子としてメリバ宮殿に住んでいた。ヘンリル国王も先は長くないことが予想されており、また、優秀であったカイル王子が継ぐことも貴族、国民ともに異議はなく、むしろ、その治世に期待するむきもあつた。そのため、彼が肺結核で亡くなった時人々は悲しみにくれへンリル国王もひどく沈んだ。結局、失意のまま昨年の冬に亡くなったわけだが。

「お兄様は優秀だったものね・・・私とは違い父上にも期待されていた」

正直に言えば、シシリアは誰にも「王」として期待されていなかった。もちろん、1人の子どもとしてそれなりに愛されていたことを否定はしないが、それでもやはり次期王としてメリバ宮殿に入ることになってヘンリルに挨拶に出向いてもいい顔をされなかった時の悲しみは深く根付いている。

「ヘンリル陛下は、陛下を失うことを恐れ、御前会議が提案した細則に反対されなかったようです」

シシリアの発言には特に言及せずにフォンビレートは続けた。フォンビレート自身としては、ヘンリルがカイルに多くの期待を寄せていたが特別シシリアの治世を心配していたわけでもない、と思っっている。ただ、王位継承直前に失った、その喪失感に耐えきれず、王

位継承者として跪くシシリアの姿にカイルを見て直視できなかっただけではないかとも考えている。ただ、これは考えでしかなく、シシリアを慰めるには材料が足りな過ぎるため、フォンビレートが口出すことはなかった。面会に際してヘンリルが口にした事実のみを伝える。不確定なことを主人に対して口にはしない、というのがフォンビレートのモットーであり、それゆえ彼は「優しく」はないが「優秀な執事」であった。

「その内容は？」

シシリアもフォンビレートが話を逸らしたことに気付いたが、それが彼の誠実さでもあることを知っているので特に追及したりもしなかった。なにより、落ち込んでいる暇はない。

「『直系王族が死に絶えた場合、その直系王族第1子の男子の家系が王位を継ぐものとする』というものです。これは、御前会議により評決されたものであるため、一般には一切知らされません。また、第2位以下の王位継承権の発表も正式にはなされないため、国民が知るようになることは無いでしょう」

ようやくシシリアにも話の全容が見えてきた。

御前会議で決定されたということは公爵3人、侯爵4人の合わせて7人だけで採決を行われたことを指す。当然、その中には現アルイケ侯も加わっていたはずだ。王国法の原本はその7人と王の合わせて8人がいなければ決して開くことのできない王室金庫に保管されることになっており、よほどのこと無ければ確かめようとするものはいない。王位に関する法律は、公表の必然性をもたない。そして、王位継承者は御前会議内でのみ確認が行われ、「公式」の発表は行われぬ。

つまり

「つまり、現在第1継承権は第2王子ミシエル様の御子ダン殿下ではなく、第1王女第1子前アルイケ侯の家系にあるということになり、陛下がなんらかの事情で王位を放棄された場合、王権^{じたい}自体がアルイケ侯の家系に移る、ということになります」

王家を守るための秘密を逆手にとって、アルイケ侯はまんまと第1王位継承者の地位を勝ち取ったのだ。シシリアは春に即位したばかり。つまり、メリバからの引越しは完了していない。また、王位継承などという早急な案件ではない報告を意図的に後回しにされれば、シシリアが聞くことは無い。当然、遅くともあと数カ月すれば第1継承者は発表され、その細則が明らかになるだろう。だが、それは数カ月先であり、このままシシリアが殺されれば、彼は誰にも気づかせずに王位に就く。

「おそらくアルイケ侯は、前アルイケ侯より王位が目の前にあったことを聞いたのでしょうか。そして、ちょうど良く直系の王位継承者が1人だけになった」

そこで、野心を刺激された侯爵が企てたのだ。

永い時間をかけて。周到に準備をして。何も知らないまままでシシリアを消してしまおうとして。

「こうなると、本当に直系の王族が事故死であったかどうか疑問になってきますが、既に調べる術は失われております。当面にして唯一の問題は、彼が毒入りの茶葉を宮殿によこしたことです」

シシリアはしばし呼吸を忘れて、茫然とした。

アルイケ侯が裏切ったこともそうだが、その他の6家が間接的にこの暗殺を承認していることを知ったからである。彼らが御前会議にて提案される内容に事前に目を通さないとはいえない。国政を担ってきた彼らがアルイケ侯の狙いに気付かないはずはないのだ。それを共同で提案したということは、「アルイケ侯が王位に就くことを彼らが認めた」ということである。もっと言えば、アルイケ侯が王位に就いた後、それを奪い取る算段をしているということに他ならない。

「彼らは……奴ら……」

シシリアの顔は怒りと悲しみと恐怖とで震えた。

命を狙われることは何度もあった。貴族から狙われることも他国が

ら狙われることもあったが、国の重鎮たる7大公侯爵家に裏切られるとは、それも王位を継いだ直後に狙われるとは思ってもしなかったのだ。

「やはり父上は、私の事など気にしていなかったのだ」
揺れる思考の片隅で考える。

父がアルイケ侯の、ひいては7大公侯爵家の企みを見逃していたはずはない。

つまり、自分は国政に難ありと判断され、殺されたとしても良いとされていたのだと。

ああ・・・

「王になりたいなどと誰が言った？」

「誰かがお兄様たちを殺した？」

「誰が・・・味方なの？」

次々と口から溢れる繋がりのない言葉は、悲痛な響きを伴って部屋に響いた。

そこに女王としての威厳はなく、ただただ父を慕い求める幼子の途方に暮れた表情があるだけである。

「いかがでしたでしょうか？シシリア様」

突然、シシリアの絶望に一筋の声を通る。フォンビレートの冷たい声に、シシリアの意識が急速に浮上した。

視線を上げれば、フォンビレートのいつもの瞳がこちらを静かに見詰めていた。

その瞳は、彼が第三執事、つまりシシリア付きの使用人の中で最上級使用人となった日のことを思い出させた。

約3年前。

フォンビレートは、ちょうど今と同じようにシシリアの側に立っていた。

その時、シシリアは王宮殿の近くアーデル宮殿に住んでいた。次期国王でない王族は全てここに住まう。シシリアもそうであり、しか

しそこに住まうただ一人の直系王族・シシリアがその主であった。フォンビレートは15才。その若さでは・・・と多くの使用人から反対されたがシシリアはそれを押し切ったのだ。

その任命式 筆頭執事の任命式に比べればもつと簡素なものだがにて、ヘンリルについていた当時のイジュール家の筆頭執事ダニタ「イエール」ダ・クレマは問うた。

「汝、何を願う」と。

それに答えたフォンビレートは一切濁りのない瞳でシシリアだけを見詰めて

「シシリア様は私の確信。私の信頼。私の全てにございます。」

「滅ぼせとおっしゃるのであれば徹底的に滅ぼします。壊せとおっしゃるなら完膚なきまでに壊します。守れとおっしゃるのであればどこまでもお守りいたします」

と言い切ったのだ。

それは、執事の答えとしてはとても合格点を与えられるようなものではなかった。

執事とは時に主人をいさめることも必要であり、全体としての主人の評判のために尽力する存在である。主人の願いを全て叶えたいというのが執事の本望とするところであるが、それだけで「良い執事」とは成りえないのだ。

だから、それを聞いたダニタも血相を変え、フォンビレートを叱ろうとした。

それを止めたのはシシリアであった。

「いいわ、いつでもどんな時でもあなたは私のただの味方でいなさい」

その言葉にフォンビレートは、頭を垂れることで答えたのだった。

「王家など・・・この国など知ったことはありません」

それは、国民に聞かれれば啞然とするであろう一言。だが、シシリアにとってはなによりも甘い。「陛下」ではなく「シシリア様」と言うことによつて、フォンビレートはシシリアの絶対の味方であることを示したのである。

「私の誓いの言葉は一片の偽りも含んではないのです。」
故にご命令ください、とフォンビレートはかつてのように頭を垂れた。手足となりましょう、と無言のうちに四肢を差し出すフォンビレートの仕草に、シシリアの頭が働き始め、この事態への最も効果的な処置を探し始める。

数分の沈黙の後、シシリアは命令を下した。

「
「御意」

フォンビレートは優雅に一礼すると、シシリアの私室を出て行った。ただ、主の望むものを備える手段を整えるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570y/>

その執事、大胆不敵

2011年11月20日16時38分発行